

# アートを通して日常にある差別表現に気付く

## ワークショップの実践

Team Rainbow

伍鳳祥, 四宮貴久, 森脇咲子, 劉旭

共生社会の実現には、共生を求める当事者が様々な場面で共生が達成されているかを不断に問う必要がある。その際に差別や不平等が取り上げられている点や「気付き」(アウェアネス)の機会によって当事者の活動の素地が作られる点に注目し、本研究ではアートを通して日常にある差別表現に気付くワークショップを実践した。これは、自分自身が認識できる偏見(顕在的態度)が変わっても無意識的な偏見(無意識バイアス)は殆ど変わらないことや、アートが人間の体験質(クオリア)に働きかける特徴を持つことに基づいてもいる。今回は音楽や映像、寸劇に絞り、日常にある差別表現に気付く方法を提案し、参加者と共有した。その結果、アートを通して差別表現に気付くには、アートと一人ひとりの関心事の結びつきが重要になることが考えられた。また、参加者がアートを介し自他の価値観や経験に開かれる環境を主催者が整え続けることが課題となった。

Keywords : アート, 日常生活, 差別表現, 気付き, ワークショップ

### 1. 研究の背景と目的

人々が互いの人権を尊重し、共に生きて行ける社会(共生社会)は、様々な領域から実現が求められている社会である。共生社会が求められる領域ごとの背景としては、例えば、大資本による資源の搾取や自然破壊への批判(エコロジー)、身体的な能力の違いによって人間を価値づけない思想や実践(ノーマライゼーション)、エスニック・マイノリティによる同化思想への対抗(文化多元主義・多文化主義)、性的役割分業を自然のものと思わず、経済的・社会的な格差を認めることへの批判(フェミニズム)があった。しかし、誰と誰が共生するのかということがマジョリティから決められがちであり、共生を捉える立場が異なることで他者を排除する思考に陥ることもあるために、実際には容易に実現しない社会でもある。だからこそ、国際的な規模であっても、またはそれよりも身近な一人ひとりの日常生活であっても、そこで共生が達成されているかを、共生を必要とする当事者が不断に問う必要がある(野口・柏木, 2003)。その際、当事者によって活動が様々な展開されるにしても、差別や不平等といった、人間の差異による不当な力関係に目が向けられることになる。

本研究では、誰もが人間の様々な差異から他者に意識的・無意識的に偏見や力関係を持つこと(メンミ, 1975)や、そのような条件付けを与える社会の中で

生きていること(スー, 2020)を踏まえ、共生社会の実現に多くの人々が関わるができるアプローチを構想した。自分自身が認識できる偏見(顕在的態度)が変わっても無意識的な偏見(無意識バイアス)は殆ど変わらないことや、アートが概念を捉える言語とは違い、人間の体験質(クオリア)に働きかける特徴を持つことを踏まえ、本研究の目的をアートを紹介した人々の相互作用によって、言葉の外側にある差別表現への態度や実体験に立ち返ることとした。

### 2. 研究の方法と内容

本研究の方法は、共生を求める当事者の活動が具体化する前に、「気付き」(アウェアネス)の機会によってその活動の素地が作られるという点に注目し、メンバーと参加者がアートを通して日常にある差別表現に向き合ったり気付いたりするワークショップを2021年11月20日に岡山県天神山文化プラザで開催することとした(図1, 2)。アートは多様な分野を持つため、身体表現が伴っていることで参加者と共有しやすい音楽や映像作品、寸劇を用いた。内容は、メンバーが提案可能な差別表現に気付く方法ごとに3部構成とした。また、参加者(当日は18名)にこのワークショップがどのようなものであったかを問うアンケートを実施した。

アートを通して  
一緒に気付くませんか？  
日常にある  
差別表現

無料ワーク  
ショップ  
◇定員35名◇  
要予約

2021  
11/20 SAT. (岡山市北区天神町8-54)  
13:30~16:30 (13:15 開場)  
岡山県天神山文化プラザ  
3階 第2会議室

※定員35名に達し次第  
受付終了となります。

お互いを尊重する共生社会を目指して

日常で人と接するとき、自分と何らかの違いをもとに相手に  
とって不利な立場を一方的に作りだしていませんか？相手の  
立場や行動の心をめぐることはありますか？私たちが  
アートを通してこれらに向き合うワークショップを開催します。  
第1部では在日韓国人である鄭雅美さんによる舞台女優として活動  
してこられた経験と、鄭氏での映像の上から説明から、私たち  
の日常にどのような差別表現があるかに気付いていきます。そし  
て、第2部のお芝居やディスカッションを通して、私たちの日常に  
ある差別表現やそれに対する一人ひとりの立ち回りに気付いてい  
ていきます。

1▶『「在日として」自分の道」  
歌手・元劇団四季 鄭雅美

2▶「映像から気付く差別表現」

3▶「私たちの日常にある差別表現」  
お芝居・参加者全員でのディスカッション

●ゲスト講師  
鄭雅美  
(ちよん あみ)  
歌手・俳優・舞台女優

京都府立中高等学校にて歌を志し、新制大学校・師範  
教育学部音楽科を卒業。京都府立舞踊団を経て2003年  
12月に劇団四季入団。14年12月の退団までロングラン  
ミュージカル『ライオン・キング』ラフィキ役として  
約1500回出演を果たす。圧倒的な歌唱力を生かし  
『ジー・ラス・クライト・スーパースター』ほかガラ  
コンサートや指導など幅広く活躍する。

■主催/岡山大学大学院 教育学研究科 教育学専攻 Team Rainbow ファンリリーダー 大竹喜久教授

お問合せ先  
ご予約/お問合せ TEL: ( )  
Email: s  
※お名前・電話番号・Emailアドレスをご明記ください。〒730-8501 岡山大学

図1: ワークショップのチラシ



図2: ワークショップの様子

## 2-1 第1部: 「在日として」自分の道

第1部では、ゲストスピーカーの講演やパフォーマンス、音楽、映像作品を用い、場所や空間を手掛かりにして日常にある差別表現に気付いていくことを参加者に提案した。つまり、差別表現がどこで起こったのかをゲストスピーカーの講演やパフォーマンスに沿って具体的に紹介し、参加者と共有した。ゲストスピーカーは、在日韓国人であり、歌手・舞台女優の鄭雅美氏であった。鄭氏は、始めに自己紹介として舞台「ライオンキング」の挿入歌「Circle of Life」を歌い、自身が長年入団して

いた劇団四季での経験を述べた。次に、劇団四季への入団によって初めて鄭氏が日本社会を経験したことから、鄭氏は在日コミュニティと日本社会との差異を振り返り、通名の使用や日本人からの差別的な発言、それらに対する抵抗感を述べた。最後に、鄭氏が育ってきた環境と共通点のある1968年の京都を舞台にした映画『パッチギ!』(井筒和幸監督、2005年公開)の上映や、鄭氏が「イムジン河」を歌うことによって、差別表現の背景に歴史的な因果関係があることを示した。

## 2-2 第2部: 映像から気付く差別表現

第2部では、現代に生きる人々の学校や職場、家庭といった日常が描かれている2つの映像作品『最強の二人』(エリック・トレダノ、オリヴィエ・カナシュ監督・脚本、2011年公開)と『THE WAVE』(デニス・ガンゼル監督、2008年公開)の上映から、人や場所が持つ経験や時間の流れに注目して差別表現に気付いていくことを提案した。つまり、差別表現の背景にある因果関係を個人や歴史に焦点を当てて、映像と共に参加者に紹介した。

『最強の二人』は、事故により首から下が麻痺してしまった富裕層のフィリップと、職を探し求めてフィリップを介護することになった黒人のドリスの友好を描いた作品である。メンバーは、フィリップが障がい者としての自分を卑下する場面や、ドライバーが障がい者用の標識を気にせず駐車する場面、フィリップの友人が人種や前科によってドリスの性格を決めつける場面を紹介した。そして、これらの差別表現がフィリップやドリスにとってどのような意味を持っていたために、両者の友好が深まったのかを説明した。

『THE WAVE』は、政治体制の授業で独裁制を担当した教員と受講した生徒達が、実際に独裁的な集団を作っていく過程を描いた作品である。メンバーは、教員や生徒が集団に異を唱える人々を攻撃する場面や、連帯感によって集団が高揚する場面、集団内で対立が生じ最終的に集団が存続不可能になる場面を紹介した。そして、これら差別表現の背景に登場人物達の劣等感や帰属感があることを、ナチス独裁制とホロコーストの歴史を参考に説明した。

## 2-3 第3部: 私たちの日常にある差別表現

第3部では、メンバーによる寸劇や参加者とのディスカッションを通して、日常にある差別表現やそれに対する参加者の向き合い方に気付くことを提案した。つまり第1部と第2部で提案した気づきを参考に、参加者がそれぞれ向き合っている差別表現を、会場の全員で共有した。寸劇の内容は、ある外国人留学生が違和感を感じた日本でのアルバイトの応募要項を基にした、コ

ンビニでのアルバイトの面接であった。参加者は寸劇を見た後、外国人留学生の感じた違和感と、参加者自身が気付いたり向き合ったりしている差別表現について、ディスカッションを行った。最後はアンケートを実施した。質問項目は次の通りである。

- ①本日のワークショップに参加された皆様のご年代をお聞きます。該当する年代に○をつけてください。10代 20代 30代 40代 50代 60代以上
- ②本日のワークショップは三部構成でした。この三部構成のなかで何が一番好きでしたか？あなたの関心を引いた順に番号を付けてください。第一部() 第二部() 第三部()
- ③この三部構成のなかで特に何が印象に残りましたか？
- ④差別について、今、改めて思っていることを教えてください。
- ⑤その他に感じたことやご意見などがありましたら教えてください。

### 3. 結果と考察

次にメンバーの関与観察や意識体験、参加者のアンケートから、ワークショップでの参加者、ゲストスピーカー、メンバーそれぞれの気づきと、本研究の目的の達成状況を考察する。関与観察とは、研究者や観察者が、保育や特別支援、医療、介護、教育など、相手や自分の心の動きを捉える必要がある領域での、研究対象(被験者や協力者)を観察する方法である(鯨岡, 2013)。アートを介した人々の相互作用の中にメンバーも参加したため、この方法を採用した。意識体験とは、関与観察から得られた気づきを指す(鯨岡, 2013)。

#### 3-1 参加者の気づき

実際にワークショップに参加すると、差別表現に気付くことが、単に差別表現の事例を列挙するだけで終わらなかった。参加目的や関心が異なることで様々な気づきが現れてもいた。参加者の場合、差別表現の事例への疑問や関心が第3部のディスカッションを通して示された(図3)。また、アンケートに書かれた差別表現に対する気づきに次のような特徴があった。

- ①参加者自身が経験した差別表現への気づき
- ②他者の考えや価値観に広がりを感じたことや、それによる自分の考え方の変化への気づき
- ③日常生活の中で差別表現に気付く難しさへの気づき
- ④ワークショップを運営するメンバーの不備への気づき

- ⑤第1, 2, 3部から受け取った自身の感覚に触れていること

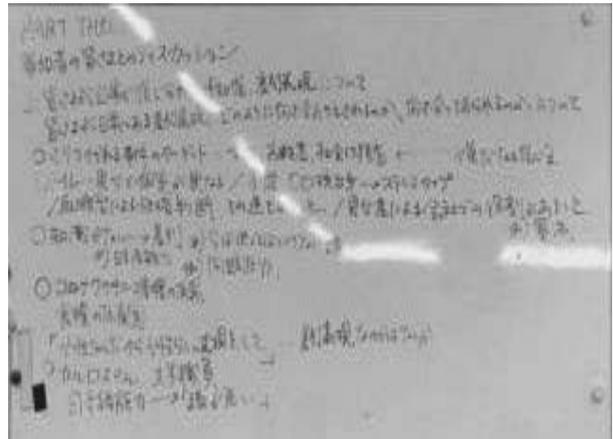


図3：参加者が疑問や関心を持った差別表現(第3部)

#### 3-2 ゲストスピーカーの気づき

ゲストスピーカーの鄭氏は、第1部で、在日コミュニティと日本社会が接するところに自身のキャリアや差別の体験があったことを踏まえ、差別表現に気付くには歴史を含む他者を理解しようとしているかに関わっているのではないかと意見を述べた。これは、自身のキャリアや生活を振り返ることを参加目的とした鄭氏が、メンバーと第1部を構想する中で浮かび上らせた、「日本に生まれざるを得なかったことを理解してほしい」というメンバーや参加者に対するメッセージであった。

#### 3-3 メンバーの気づき

メンバーの場合、①異なる視点や価値観を持つ他者との交流の機会を参加者や鄭氏が強く求めていたこと、②人々がアートを介し自他の価値観や経験に開かれる環境を、主催者として整え続ける必要があることが大きな気づきであった。これらは例えば3-1の④にあった、参加者に配慮した照明や映像の上映が不十分であったこと(第1, 2部)、映像の上映と説明をより関連させること(第2部)、メンバーや参加者が会話をする時間が少なかったこと(第3部)といった、参加者の指摘によって気付かされたことであった。

#### 3-4 研究の目的の達成状況

以上のような気づきを踏まえると、アートを介した人々の相互作用によって言葉の外側にある差別表現への態度や実体験に立ち返ることは、今回の場合、一人ひとりが抱えている関心事が音楽や映像、寸劇、人々の交流から得られた情報と照らし合わされることであったと考えられる。また、それによって一人ひとりの関心事

が、異なる視点や価値観を持つ他者、普段は見えにくい差別表現の歴史的な因果関係、共生が達成されているかどうかへの問いにまで広がる可能性があったのではないかと考える。

ワークショップでは、3-1 の④やメンバーの気付きで見られたように主催者側の不備もあったため、本研究の目的は完全に達成されたとは言えない。しかし、異なる視点や価値観を持つ他者とアートを通して交流する中で、差別表現に気付くためのアートと一人ひとりの関心事の結びつきを見出せたことが成果であった。

#### 4. まとめと展望

以上のワークショップは、本研究のファシリテーターである大竹教授の言葉をお借りすれば、「内容に余白を残した」ものであった。「なぜあの3部構成であったのか」「なぜ岡山という場所に結びついた差別表現を取り上げなかったのか」「あれは差別なのか」など、参加者に多くの問いが生まれ、それらを引き受けて考えようとしていたこと、つまり伝達モードのコミュニケーションだけではなく生成モードのコミュニケーションも生まれたワークショップであったということである。他者の意見によって新たな問いが醸成されたり議論されたりしたことは非常に発展的なものであった。結果として、本研究はメンバーとゲストスピーカー、参加者が相互的に学習する空間を作り出し、次なる課題を見出すことができたと言える。

今後の展望としては、岡山県下の市町村でのワークショップ開催の可能性が挙げられる。既に県内某市の担当者から、「アートを通して」という切り口での人権に関わる講義は前例がないという点で、興味を持たれていた。本ワークショップで得られた課題を改善し、継続的な展開になれば幸いである。

#### 5. 参考文献

- 1) 鯨岡峻(2013).『なぜエピソード記述なのか「接面」の心理学のために』東京大学出版会.
- 2) スー, デラルド・ウィン(2020).『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種, ジェンダー, 性的指向: マイノリティに向けられる無意識の差別』(マイクロアグレッション研究会訳)明石書店.
- 3) 野口道彦, 柏木宏編著(2003).『共生社会の創造とNPO』明石書店.
- 4) メンミ, アルベール(1975).『差別の構造』(白井成雄/菊池昌実訳)合同出版.